

第4回 小金井市産業振興プラン策定委員会 議事録

日 時 令和3年11月4日(木) 午後7時～午後9時

場 所 小金井市役所本庁舎3階 第一会議室

出席委員 11人

委員長 中庭 光彦 委員

副委員長 斉藤 浩 委員

委員 森 文香 委員 清水 薫 委員

高松 結花 委員 田中 千鶴枝 委員

西川 亮 委員 大坪 正直 委員

山城 裕路 委員 今井 啓一郎 委員

鴨下 勇司 委員

欠席委員 なし

事務局 市民部長 西田 剛

経済課長 高橋 啓之

産業振興係長 鈴木 拓也

株式会社国際開発コンサルタンツ 氏原 茂将

傍聴者 2人

議事

1. 開会

2. 議題

産業振興プランにおける取組について

事務局が資料1を用いて前回プランの取組に関する考え方を説明した後、2つのグループに分かれて資料2に基づき取組について意見交換を行った。

中庭委員長 本日は資料2について議論していきたいと思う。「小金井市産業振興プランにおける取組」ということで、上には「まちの活気と5つの要素」、左側にある施策案は「27の事業」が書き足されている。この中には今までの委員会が出た事業、すでに市として取り組んでいる事業が並べてある。本日は、この事業を具体化していくための議論をお願いしたい。

本日も行ってもらいたいのは、施策案のタイトルを文章化したうえで、「事業内容の具体化」、「具体化したものを追加」、「市が取り組んでいる事業を内容によって細分化や併合」の3つを議論してもらいたい。これによって各事業が相乗効果を生むような内容としていきたい。

グループ1：中庭委員長、森委員、田中委員、今井委員、鴨下委員

- 中庭委員長 事務局から「商工会による事業の支援」について説明をお願いしたい。
- 事務局 これは商工会自体に運営補助金を交付している。また商店街が行うイベントとは別に、商工会が行うイベントに対しても市としては補助金を交付している。経営相談は商工会が中心にやっているの、それにはタッチしていない。
- 中庭委員長 問題は、その支援が事業や経済活動に役立っているのか。または役立つようにするためには、どのようにしていくのがいいのかである。
- 今井委員 商工会の人件費は東京都から支出されているが、市の職員が商工会に常駐することはできないのか。商工会と経済課は緊密な話し合いが必要だと思うが、現在はできていない。商工会という組織が濃んでいるので、市の職員によってかき回してもらいたい。
- 中庭委員長 他市では実際に行っているところもある。
- 事務局 小金井市は職員派遣の規定がある。現時点で商工会は派遣先には入っていないが、規定を改正すれば派遣は可能である。現在、小金井市観光まちおこし協会には市職員を1名派遣しており、市としても職員がいることでコミュニケーションが円滑になると感じている。しかし、庁内ではいつまで派遣を続けるのかとも言われており、実態としては課題がある。
- 今井委員 この委員会で職員派遣という案が出されれば、行政としては検討するのか。
- 中庭委員長 メニューを提示することはできるが、できるかどうかは行政の判断である。
- 今井委員 3年や5年など試験的に派遣してみて、後から効果を検証してみるようなかたちでもいいと思う。
- 事務局 商工会がどのようなスタンスなのかによっても思う。
- 中庭委員長 「商工会による事業の支援」は残した上で「商工会と市が情報を共有できるようにする」を追加するのはどうか。まちの活気との関連としては「暮らしていて楽しいこと」と「まちを盛り上げる人が多いこと」でよいか。
- 今井委員 「職員を派遣する」を例として記載してもらいたい。
- 中庭委員長 それでは例として「職員の派遣等」を記載する。
次は「商店街が行う事業への補助」だが、目的を定めたかたちで補助金を交付していくべきだ、という議論が前回の委員会までにあったと思う。
- 今井委員 これは東京都が行うチャレンジ戦略支援事業の補助金であり、市が独自に商店街へ交付する補助金もあるのか。東京都の補助金に連動して市も交付するイメージがある。
- 事務局 市独自の補助金が皆無というわけではないが、補助金によって可能になる事業規模が問題である。費用対効果を考えれば、東京都の補助金と連動させる方がメリットがあると思う。
- 中庭委員長 補助対象となる商店街が行う事業というものは、なかなか分かりにくい。
- 森委員 自分もイメージしにくい。初めて資料を見る人にとって、具体的なことが書いてあった方が分かりやすいと思う。
- 今井委員 「チャレンジ戦略支援事業費補助金」の内容は「イベント」と「活性化」の2

- 本柱となっている。イベントはお祭りの実施に使うことができ、活性化は街路灯の整備やポールフラッグの導入や調査などに使うことができる。
- 森委員 資料だけを見ると分かりにくいというか、分からない。
- 中庭委員長 具体的な記載にした方がいいので、だれが責任をもって、どのような使い方をするのかを明文化する。
- 今井委員 この補助金は地域のために使う補助金である。そのことも分かりやすくしないといけない。
- 中庭委員長 ブランド商品等の開発にも補助金は使えるのか。
- 今井委員 使うことはできる。
- 森委員 そうするとまちの活気との関連性も変わってくると思う。還元することが目的なら「人と人との関係が深いこと」や「まちを盛り上げる人が多いこと」も入ってくるのではないかな。
- 今井委員 すべてに該当すると思う。商店街に人がきてくれるようにするためには何でもやるはず。
- 中庭委員長 やろうと声を上げてもらえないのが商店街の問題である。ただ、やろうと思えばチャレンジできるので、小金井市は恵まれた環境だと思う。「商店街の行う事業」の例として、活性化の枠組みとして街路整備や案内板の設置のほか、商品開発や、物産展のような販路拡大も記載してはどうか。
- 今井委員 市の物産展はこれまで例がないが、できると思う。
- 事務局 東北の復興応援の取組を継続して実施している。
- 中庭委員長 たしかにチャレンジ支援に該当すると思う。
- 今井委員 商店会は独自のルートで復興支援をすることもできるが、金銭的な準備ができない。商工会がサポートできる立場にあるのではないかな。
- 中庭委員長 商工会と商店街のメンバーが重複しているのではないかな。
- 森委員 正直、商工会と商店街の違いが分からない。
- 今井委員 商店街は、それぞれの地域を対象にしている。一方、商工会は市内の人なら誰でも入れる組織であり、市内全域を対象としている。
- 中庭委員長 商工会は工業分野もあり、工場も加入できる。商店街と商工会は重複する部分もあるが、できることなら連携した方がいい。その点、小金井はいかかか。
- 事務局 連携はしているが、若干ちぐはぐなところもあるように見える。その要因として世代間ギャップがあるのではないかな。商工会の幹部と商店街でイベントを実施する人と世代が違えば、商工会の幹部には地元の企業を営んでいる人もいるので、商店街という現場との温度差は生じているだろう。
- 中庭委員長 商店街と商工会は相乗効果を生むために相互の連携は必要だという考え方もある。ただ、双方から連携ができないといわれてしまえば、そこで話は終わってしまう。
- 事務局 小金井には18の商店会があるが、駅周辺以外の商店街では店舗が減少するなど、厳しい現実がある。
- 中庭委員長 前回の会議で、ブランドが大切だという意見があった。商店街の事業にもブランドづくりが含まれると思う。その際には個々の商店街で取り組むよりも商店

街連合会で取り組まないといけない。ただ、商工会も連携しないと小金井ブランドにはならないのではないかと考える。そう考えると「商店街と商工会が共同で事業に取り組む」といった内容を盛り込む必要があると考える。

今井委員 すべての商店街はできなくても、一部の商店街と商工会が協力することは可能かもしれない。

中庭委員長 広域に展開しないと利益化が難しいだろうと思うので、ぜひ検討いただきたい。次は「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」だが、このようなきっかけが少ないという意見が前回の会議ではあったが、これを具体化するならどのような文言がいいか。

森委員 自分が勤務する福祉施設では、コロナ前までは毎月「こども食堂」を開催していたが、今はできなくなっている。そこで、地域の飲食店から食事を提供いただき配布している。これによって、飲食店を知ってもらうきっかけになり、地域のつながりをつくることになっている。地元の農家さんが販売することで施設利用者につながっている。このような小さな活動からでも地域と事業者をつなぐことはできるのではないかと考える。

中庭委員長 「地域の人と事業者がつながる拠点をつくる」という項目を設け、例としていまの活動を記載してはどうか。参画しやすい場だと思う。

今井委員 農家は個別に野菜の売買ができるのか。それとも事前にJAなどへ申請が必要なのか。

事務局 基本的には勝手に売れると思う。JAなどへの申請は必要ない。ただし、小金井市全体でブランディングしていく流れになるなら、JAと連携した方がいいと思う。個人としての活動は限界があるのではないかと考える。

中庭委員長 「地域の人と事業者がつながる拠点をつくる」という内容と具体的な記述を入れていきたいと思う。次は「融資斡旋」だが、これもよく分からない。

今井委員 実態は融資の斡旋はしていない。利息の補助をしているだけではないか。貸出の判断は銀行や保証協会であり、市は後押ししているかぎりである。勘違いしている人もいるが、市として独自のお金を貸しているわけではない。

事務局 以前は市が独自に貸していたこともあった。それが信用保証協会を入れた斡旋制度に変わった。融資審議会は今も残っていて、現在は市の政策に対する意見をやる場になっている。

中庭委員長 この制度があれば、小口の必要な市内事業者を把握することができるだろう。

今井委員 融資斡旋の制度は金額が小さいため、申請しても足りないことが多く、使い勝手が悪い。ただ金利は安いので、貸付金額の上限が上がると利用しやすくなるのではないかと考える。

中庭委員長 具体的な表記は難しそうなので、いったん「融資斡旋」は今のままにしておいてはどうか。次は「事業者に対する経営指導等」だが。

事務局 これは商工会の範疇になると思う。中小企業診断士の資格を持っている人もいないのではないかと考える。

今井委員 商工会に経営指導員はいるが、商工会の職員に中小企業診断士はいないと思う。商工会がやっていることなのか。

中庭委員長　そもそも経営指導は、経営者のためになっているのか。人脈を持っている人ならいいのだが、いかがか。

今井委員　ためにはならないと思う。実際に経営をしている人の方が役に立つと思う。今、東京都の「明るい廃業事業」があるが、そこでは何でも相談会があり、実際に経営している人からリアルなアドバイスが聞ける。本来なら商工会が行うべき内容だが、商工会では指導員の誰が担当になるかで変わってくる。

中庭委員長　商工会と商店街が連携すべきだ、という視点からするとリアルな事業者が相談に乗った方が有効だと思う。互助のようなかたちで経営指導するチャンネルがあってもいいと思う。

今井委員　業種の違う人の意見に対するニーズもあるだろう。異業種の人から話を聞けるとおもしろいアイデアが出てくる。その意味では商工会や商店街がやれる内容だろう。

中庭委員長　経営指導をしてくれる人の、チャンネルを増やすことが重要である。次は「商店街の事務局機能の強化」について。

今井委員　国や東京都の補助金は書類が非常に多く、働きながら書類を作成するには難しい。アイデアがあっても書類の作成できる事務方がいないため、補助金の申請ができない。手伝ってもらっても手数料が払えないという現状がある。アイデアを持っている人が事務もやらないといけない。

中庭委員長　これは市民活動や事業者活動をしていくうえで永遠の悩みである。

今井委員　最近は自分の商売のための活動は少なくなっていて、安全のための街路灯の設置や安心のための見守り、防災などの活動が増えている。市内に立ち行かなくなりそうな商店街はいくつかあるが、商店街がなくなってしまう前に手当をしようと考えている。そのような活動に対して、商工会にはぜひ事務的な部分のサポートをお願いしたい。

中庭委員長　観光まちおこし協会はどのような役割になるのか。

今井委員　協会の立ち上げた時には、そのような活動も想定していたと思うが、現在は観光面でがんばっているものの、まちおこしについては十分ではない。

中庭委員長　事務局に人件費を割くわけにはいかないのに、全般を管理できる人がいないと立ち行かなくなるだろう。

今井委員　市職員が商工会に出向するのもよいし、観光まちおこし協会がその役割を担うのもよいが、誰がやるのかが決まっているとよい。それが明確でないため、困っているところがある。

中庭委員長　大切なことは、観光まちおこし協会にしてもNPOにしても、連携して事務局機能を果たせるようにしてはどうか。

事務局　商工会には商店街担当はいるので、あまり商店街が商工会から離れてしまうのは別の問題が生じる可能性もある。色々なところから協力をもらいながら、商店街の活性化につなげていけるのがいい。

中庭委員長　連携ができれば、まちの活気のすべてに関連することになる。その意味でも連携が鍵になってくる。次は「ベンチャーポートとの技術連携」だが、これについては意見が出にくいと思うので、措いておく。

事務局 直接地域に関わっているわけではないが、連携講座を開設している。ただ、参加者が少ないという課題がある。とっかかりがないという印象なのだと思う。

中庭委員長 講座の内容が難しく感じる。

事務局 たしかに専門性が高く一般向けではないと思うので、興味がある分野なら楽しめると思う。

今井委員 地域といっしょにやりたいと思うのであれば、もっと自分からPRしてはどうかと思う。何をやっているのかが知られるとよいと思う。

田中委員 前提として、昔から営業している商店街やお店がメインだと思うが、スーパーやコンビニ、チェーン店などはプランの対象ではないのか。

中庭委員長 商店街とスーパーやコンビニはいっしょに活動すべきだと思う。いずれも市民にとっては生活基盤であり、それがなくなると生活できなくなる。

今井委員 多くのコンビニやスーパーは商店街の会員になっていると思う。

田中委員 それであればよいと思う。

中庭委員長 商店街に対する施策は歴史的にコンビニやスーパーから個人商店を守るものだった。ただ、現在はそのような関係性にないため、共存共栄というスタンスでよいと思う。

田中委員 そのなかに大学を入れてはどうか。小金井には大学が多くあるので、若者に対するPRの機会になるのではないか。ベンチャーポートも大学が拠点なので、関連してくるのではないか。

中庭委員長 大学生は商店街を使うのか。

今井委員 利用してもらえる大学生もいるが、少ないという印象である。大学や教員と連携してイベントをやることもあるが、卒業していくため、大学側にやる気がないと継続しない。コロナ禍ではイベントもできないため、連携は停滞している。

中庭委員長 商店街と大学の連携はあり得るだと思う。

今井委員 連携できるといいと思い、これまで取り組んできているが、なかなか利用してもらえない。もっと楽しいことでないと関わってもらえないのかと思う。ただ、大学生に売上を依存すると、大学生以外の客がつかなくなり、長期休みの売上が厳しくなるというデメリットがある。

田中委員 チャンスはありそうだが、アイデアが浮かばない。

今井委員 何かいい方法はあるのかもしれないか、考えてはみたい。

中庭委員長 大学を資源としてどう生かすのかは重要となってくるだろう。次は農業関連が続く。「農業の魅力発信」、「コミュニティ農園」、「農地を活かした食育活動」という意見が出ている。まずは「農業の魅力発信」だが、どの自治体でも取り組んでいるが、あまり役立ってはいない印象である。

田中委員 小金井の農業にどんな魅力があるのかを聞いたかった。味がおいしいのか。

鴨下委員 近くで農産物が採れて、おいしく食べられるということは魅力だと思う。

今井委員 サツマイモは寝かせた方がおいしいでしょう。

田中委員 どこで寝かせるのか。

鴨下委員 保存用の穴がある。昔の掘り穴のようなもので、防空壕だった場所もある。

田中委員 そういう話を聞けるのはおもしろい。興味を持って、食べたいと思える。

中庭委員長 サツマイモのスイーツにまで話が広がるともっと興味が持たれるのではないか。地元の農産物を地元の人が食べるのだから、加工していたとしても地産地消だろう。地元の農作物を地元の飲食店に卸すチャンネルがあってもいいと思う。

鴨下委員 B級品以下の野菜を加工している事業者は市内にもいる。ソースやジャムをつくってもらっている。

今井委員 「農業の魅力を発信する」は難しい。農業に勧誘しているのか、農産物のよさを発信するのか。

事務局 一般的には野菜が中心になるが、農業には植木や果樹、畜産業も入ってくる。全体的な魅力は何かを考えた方がよい。

田中委員 単純に「野菜の魅力」と書けない理由は、そのあたりにあるのか。

事務局 農業については、それ自体の魅力について議論したい。例えば芋ほり体験は、子どもにとって楽しく地元の野菜に触れることができる。そもそも農業とは何かという話になる。野菜づくりは分かりやすいが、小金井市の植木は有名だが、市民には伝わっていない。それが問題なのではないか。

中庭委員長 小金井市の農産物が知られていないことが問題なのだろう。そうすると、まちの活気との関連性では、「ブランドがあること」だけでなく、「人と人との関係が深いこと」にもつながると思う。

先ほどのこども食堂の取組のほか、飲食店やパティシエなどへの販路形成をやっていたきたい。

今井委員 採れたての野菜がおいしいことを知ってもらいたい。

中庭委員長 採れたての野菜でつくったお菓子も美味しいはずである。

鴨下委員 直売で買えば収穫してからの時間も短い。

中庭委員長 近所同士でまとめて発注して夕方に届くシステムは便利なのではないか。販路についてはまた考える。次は「コミュニティ農園」だが、これは実際に農作業するのが楽しいということも含まれるのか。

事務局 含まれると考えている。

中庭委員長 これからさらに広げていくのか。

事務局 市として市民農園の整備を計画的に実施しているほか、東京都が新たな法制度を活用し、「セミナー農園」の整備を進めている。

中庭委員長 その次の「農地を活用した食育活動」とは。

事務局 学校給食への地場産野菜の使用を進めている。飲食店でも地場産野菜を使っているお店もある。

中庭委員長 小金井市にブランド食品はあるのか。

今井委員 江戸東京野菜はつくっていないのか。

事務局 少ないが栽培されている。供給が不安定であることが難点である。小金井市のブランドといえばルバーブか栗だろう。

今井委員 小金井市の栗で焼酎をつくったことがある。

中庭委員長 共同でプライベートブランドの開発はどうか。

鴨下委員 小金井産の食材を使ってジャムやソースをつくっている店もある。養蜂も兼ねてはちみつをつくっているところもある。

中庭委員長 「ベンチャーポートの入居企業支援」については措いておき、「K0-T0を核とした創業支援」はいかがか。

事務局 東小金井駅の東側に東小金井事業創造センター（K0-T0）を市が設置した。その後、そのとなりに同センターの指定管理者が新たな創業支援施設をつくったので、創業をテーマにしたエリアブランディングができるようになった。

今井委員 指定管理者は運営に精一杯で、まちにかかわる余裕がないような印象である。

中庭委員長 K0-T0については資源として活用方法を考えていけばいいと思う。連携はしていく必要があると思うので、そのなかで何か見えてくるかもしれない。

それでは、「チャレンジの場づくり」、「おもしろい人が集う場」、「ビジネスコンセプト」の3つに移りたい。まず、「チャレンジの場づくり」は創業のチャレンジということか。

今井委員 これは委員会で出た意見ではないか。チャレンジショップ的な話ではないのか。

中庭委員長 事業や市民活動など、色々なチャレンジのできる場があればいいということと思う。それがおもしろい人が集う場にもなっていることにつながるだろう。

今井委員 起業を考えている人が試験的にお店をやる場ということであれば、商工会や商店街に加入することを促すことになるだろう。

中庭委員長 創業するほどではなく、市民活動的な要素もあると思う。それがつながっていった事業になる。それを計画的にやるのではなく、おもしろい人が集まり、結果的に事業になっていくというイメージだと思う。

今井委員 以前話した「あきないくらぶ」という集まりは、そのようなイメージか。

中庭委員長 そうだと思う。

今井委員 いまこそ必要ではないかと思う。

中庭委員長 商店街や商工会が新しい集まりに対してビジネスコンテストを実施する。そこに大学や学生を巻き込んでいけるといい。小金井ビジネスコンテストを開催してみてもいいだろう。

事務局 市でも実施できなくもないが、行政が主導でビジネスコンテストを実施している例は、あまりないのではないか。

今井委員 産業祭りあたりで、やってみてもいいのではないか。

田中委員 毎年やらないと価値が無いと思う。伝統的に続くようなコンテストにしていくことが必要だと思う。

今井委員 産業祭りに盛り込めるといいと思う。

事務局 仕組みさえつくれば、1回で終わることはないだろう。

中庭委員長 時間も迫っているので、残りの項目について何か意見のあるものがあれば、発言いただきたい。

今井委員 項目に限らず、旗振り役がどこなのかが分かりにくい。

中庭委員長 全体で連携するという考え方で、個々に得意な分野を担当してもらう方法はどうか。

今井委員 小金井市に住んでいる人が「このまちに住んでよかった」と思えるようなことを先にやるべきではないか。外の人がよさそうだと思うことなく。

小金井公園や武蔵野公園はあるが、何か他にスポットがつかれるといい。「水

- と緑」に関連するスポットを、商店街近くにつくるといい。水場があって休めるような場所があるといいと思うのだが、どこが主体になるのか分からない。商工会や商店街ではできない規模である。それを行政主導でできないのか。
- 中庭委員長 公民館は市の拠点として位置づけられているが、商店街も同じような機能として位置づければいいのか。その際、商店街がどのようなサービスを提供するのが大切になる。例えば荷物の配送サービス、野菜の販売、子どもの遊び場など、拠点ごとのサービスを考えないといけない。それをネットワークすることが大切なのだが、いまは分断されている。
- 今井委員 商店街の近くには公園があるのでうまく活用したい。トイレのない公園にトイレを設置するなど、工夫の余地がある。そのような公園の活用を商店街に任せるといったことがあってもいいと思う。
- 事務局 現在、都市計画マスタープランを策定している。そのなかでは市内に拠点をつくって「歩いて暮らせるまちづくり」という考えがある。流行りのコンパクトシティ的なものだが、そもそもコンパクトなまちにとって必要なか疑問である。
- また、拠点として位置づけているエリアをどのように拠点化していくのかまで描けていない。拠点を置くという発想はいいと思うが、もっと戦略的に考えていかないとけない。
- 先ほどの公園の管理については、法律的には厳しい基準があるため、商店街管理にすることができるのか可能なのか、現時点では分からない。
- 中庭委員長 現時点では記録に残しておくことは必要だろう。コンパクトシティの話だが、高齢者になると10分歩くことも大変になってくる。
- 今井委員 まちなかに座る場所は必要とされている。
- 中庭委員長 10分圏に定期的にお店が移動してきてくれるような仕組みがあるとうれしい人は多いだろう。
- 他に気になる項目はあるか。「頑張っている人の発信」、「商店街の街路、安全面の整備」、「福祉や教育と商店街の連携」はよいとして、「市内での回遊性の向上」はいかがか。
- 田中委員 自宅から市街地には車でしか行けないが、市街地には駐車場がない。
- 中庭委員長 武蔵小金井駅周辺に自転車が並んでいるが、駐輪場が足りていないからではないかと思う。
- 今井委員 近隣の自治体から自転車できて電車に乗るケースもある。離れている駐輪場もあると思う。
- 事務局 駐輪場自体の数は充足しているが、駅の近くに置きたいという需要に対しては不足している。そのせいで路上駐車がある。民地に止められると撤去できないし、規制もできない。
- 田中委員 駅前で気になるのは喫煙者のたまり場があることだが、民地だから規制できないのか。
- 事務局 そのとおり。
- 中庭委員長 アイデアがひとつある。地方だと歩行者天国などに軽トラ市のような移動店舗

が出る。便利な場所ではないのに集客がとてもよい。事務局は商店街とTMO（タウンマネージメント機関）の職員がやっている。近隣のお店と商品がバッティングしないような配慮もされている。これからの時代は移動店舗が主流となっていくかもしれない。小金井市にも移動店舗が寄り付ける場所があるといいと思う。

森委員 狛江市のスタンプラリーのパンフレットがとてもおしゃれで、見たくなるようなデザインだった。そこには普段行かないようなお店もあって、新しいお店を発見するきっかけにもなった。さらにおもしろいのが、大人用のスタンプ台紙と子ども用のスタンプ台紙に分かれていることだ。子どもは集めるスタンプは少ないが、お店であいさつをしないといけなくなっている。知らない人にもあいさつをできるようになってほしいという趣旨である。買い物の練習だけでなく、コミュニケーションのためにもなる。そのような取組は小金井市にもあっていいのではないか。

今井委員 それは狛江市がやっているのか。

森委員 市がやっているのか、商工会と協力しているのか分からないが、次回パンフレットを持参する。

事務局 狛江市のホームページで確認すると、狛江市が主体で実施しているようだ。

今井委員 だいたい何店舗くらいが参加しているのか。

森委員 大人のパンフレットでは何十軒とあった。毎回更新されているようだ。これは今回だけでなく何回も実施されている。パンフレットに記載されているお店も更新されている。

中庭委員長 これはまちの活気では、「暮らしていて楽しいこと」、「人と人との関係が深いこと」、「まちを盛り上げる人が多いこと」、「安心して出かけられること」が対象となる。

今井委員 来年度の取組として取り入れていきたい。

森委員 難点は、プレゼントの受取が市役所の開いている平日に限られることである。商店街で受取ができればもっといい。プレゼントも。もらっても嫌な気分がするようなものではなかった。

中庭委員長 最後にいいアイデアが出たと思う。有意義な話し合いができて良かった。ありがとうございました。

グループ2：齊藤副委員長、清水委員、高松委員、大坪委員、山城委員

齊藤副委員長 これまで話し合ってきた内容が資料2になる。すべて議論していくと大変なので、重要なポイントを話し合い、他については事務局で決めてもらえればいい。まずは重要だと思う項目を挙げていこうと思う。自分は「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」、「事業者に対する経営指導等」、「チャレンジの場づくり」、「おもしろい人が集う場」、「情報受発信事業」、「がんばっている人の発信」、「商店街の街路の安全面の整備」、「福祉や教育と商店街等の連携」、「市内での回遊性向上」は興味があるところだ。

山城委員 「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」、「チャレンジの場づくり」、

- 「おもしろい人が集う場」、「がんばっている人の発信」が大切かと思う。
- 大坪委員 「コミュニティ農園」、「コミュニティ農園」、「農地を活用した食育活動」の農業の魅力、武蔵小金井駅前に大きな大久保園の畑もあるが、何か活気づけられたり、ブランドの構築だったり、盛り上げられるのではないかと思う。
- 高松委員 ブランド面では、農業系で絞って「コミュニティ農園」、「コミュニティ農園」、「農地を活用した食育活動」に併せて「飲食店での地産地消の促進」の飲食店で紹介したり、食べられることも大切ではないか。あとは情報発信の「情報受発信事業」と「商店街の街路の安全面の整備」、「福祉や教育と商店街等の連携」、「市内での回遊性向上」が暮らしていて楽しいことにつながることも大切だと思う。
- 清水委員 人の魅力は重要だと思うので、「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」、「チャレンジの場づくり」、「おもしろい人が集う場」、「ビジネスコンテスト」、「情報受発信事業」、あとは「がんばっている人の発信」も大切かと思う。
- 斉藤副委員長 これまで挙げなかった項目は飛ばして進めるが、他の項目と絡んでくると思う。現在取り組んでいる事業は、後ほど時間があれば話し合いたい。
- 西川委員 現在取り組んでいる事業よりも、委員会で出てきた事業や提案を重点的に議論していきたいと思う。産業振興プランにおける目玉を考えると、小金井ならではの特色としては農業が挙げられるので、農業関係の「コミュニティ農園」、「コミュニティ農園」、「農地を活用した食育活動」、「飲食店での地産地消の促進」あたりは、これから農業の価値を高めるためには必要かと思う。それから「チャレンジの場づくり」、「おもしろい人が集う場」は関心がある。
- 斉藤副委員長 3人以上が関心を持っていると言った項目は、「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」、「農業の魅力発信」、「コミュニティ農園」、「農地を活用した食育活動」、あとは「チャレンジの場づくり」、「おもしろい人が集う場」、「情報受発信事業」、「がんばっている人の発信」、そして「商店街の街路の安全面の整備」、「福祉や教育と商店街等の連携」になる。これらについて具体的にどのようなことをやっていくのか考えていきたい。
- 「地域の人と事業者をどうつなぐか」、「農業関係」、「情報の受発信」という観点で5～6項目に分けて進めていきたい。
- まずは「地域の人と事業者をどうつなぐか」だが、いまは窓口がない。商店街も地域の人といっしょにお祭りなどができれば人手も助かるが、どこに話したらいいのか分からない。つないでくれる窓口があるといい。
- 東京都に無償で手伝ってくれる組織があり、小金井市内にも窓口になれそうな人はたくさんいる。行政が主導してボランティア希望者と事業者のマッチングをしてくれるといいが、現実的には商工会や小金井市観光まちおこし協会が仕組みをつくってもらいたい。
- 山城委員 お祭りやイベントのボランティアは、同じ人がいくつも参加している。例えば市外に出勤するサラリーマンの市民、小金井市内で事業をしていない方でもお祭りに興味がある人はいると思う。普段は参加しているだけだけど、誘われた

ら実行委員をやってもいいと思う人をどう取り込んでいけるのかが一番の問題だろう。小金井市内で事業をやっているならば商工会への入会という方法もあるが、そうではない人を巻き込めるとよい。

大坪委員 商店街が一般の人を巻き込むことは必要だが、意識の高い人しか巻き込めないのではないかと。そういう人は自主的に参加してくれるので、アクションする必要はないと思う。

斉藤副委員長 例えば消防団員はどんなに募集しても増えない。まちをツールとして使っているだけだからだ。となりの家のことも関心がないなか、どうやってまちに目を向けてもらうのか。こちらの勝手な事情ともいえるので難しい。趣味のコミュニティとつながることができれば間口が広くなると思う。

いまの時代ならアプリを開発し、それに登録すれば公共施設を優先的に利用できるなどのメリットをつければ登録してもらえらるだろう。そのアプリで商店街の活動について情報提供していけば、活動に対する関心を持ってもらえ、その延長線上に商店街のイベントやお祭りにも参加してもらいやすくなるだろう。

高松委員 山城委員も話していたが、潜在的にやりたい人はいると思う。掲示板に募集のチラシを掲示することで、興味のある人や活動したいと思っていた人に情報発信できるのではないかと。あとFacebookの小金井掲示板に参加している人たちは積極的に参加してくれそうなので、SNSを使ってみるのもよいのではないかと。

斉藤副委員長 たしかにFacebookに登録してくれている人たちは、小金井に対して熱量のある人が多い。

高松委員 情報交換の場なので、新しいお店について知ることもある。駅などに「小金井のFacebookできました」などという広告を出すと登録者が増えていこうし、情報発信の有効なツールとなる。

山城委員 町内の掲示板は多くの案内が掲示されており、なかなかスペースがない。

大坪委員 掲示板の電子化もいいかもしれない。掲示板をデジタル化することで、より多くの情報が発信できるようになるだろう。

斉藤副委員長 掲示板のデジタル化は要望としておく。

西川委員 小金井市の今後において重要となるものは大学と新しく居住してきた小さな子どもがいる家族だと思う。先日、小金井市観光まちおこし協会のイベントに参加したが、子ども連れも多く来ていた。協会は参加してくれた方の連絡先をストックしていると思うので、その連絡先リストを使ってイベント情報を発信できるのではないかと。ライングループを使って数千人の参加者を保有している自治体もある。そのような取組もまちおこし協会が中心となってできるかもしれない。まちおこし協会は、観光と名前についているので市外の人向けだと思われるかもしれないが、市内のネットワークを持っているのでメールやラインは大きなツールになるだろう。また幼稚園や小学校のロコミ情報を共有できるので、親御さんにとっても活用の幅が広い方法ではないだろうか。

斉藤副委員長 掲示板やデジタル化、ライングループなどは「情報の受発信」に該当する内容だろう。デジタル化を推進していくならSNSを使っていくことになるだろうし、現時点で小金井の伝言板は機能していると言えそう。

- 清水委員 あるイベントに参加した際、学生から「今度自分たちが食べ物を余ったりしたら他の人に寄付したい」と言われた。機会があれば参加したいという人があると実感できたので、つなぐためのツールは必要だと思った。あと、もっと学生に参加してもらうためには、例えば学校と連携して単位につながったり、市内で利用できるポイントに還元するような特典があるといいと思う。ポイントが目的でも、小金井市や事業者を知るきっかけになるだろうし、さらにイベント等へ参加してもらうきっかけにもなるのではないかな。先ほど出た登録制度やマッチングなど、仕組みづくりができるといい。
- 斉藤副委員長 学生とのつながりについては、学生は4年後には卒業してしまうことが難点だ。卒業後につづかない。研究室やクラブとのつながりができるとよい。先輩から後輩へと受け継がれていくので継続的に協力を得られるし、研究室なら研究テーマにしてもらえれば熱心に取り組んでもらえる。学生単体とのつながりと、研究室とのつながりという二重構造で連携できると、まちにとってプラスになる。
- 次のテーマ「農業関係」について。コミュニティ農園は北口で開発が始まり、これからシニア世代の方が農業を習うために50区画、その他に地域農園とこども農園も併設され、令和4年3月頃に動き出す予定である。小金井市にはまだ農地があるので、そういった場を使って魅力づくりをしていきたい。
- 清水委員 先日子どもといっしょに近所の農園でイモの収穫をしてきた。地域でのつながりがあるからこそだが、子どもはなかなか体験できないことだった。こうした体験の案内が広く行われると、子どもの教育にもよいと思う。
- 大坪委員 先日、小金井観光まちおこし協会が主催する道草市では、限定100家族で芋ほり体験ができたり、その芋を使った料理を食べることができたようだ。市民は意外と畑に対する関心があるようなので、イベントで開放したら入りたいという人は多い。都会で生活していると土に触る機会がないので、土に触れられる畑には魅力があるのかと思う。
- 詳細はまだ話せないが、いま市内で採れたサツマイモを使った商品開発を行っている。うまくいけば、地域のブランディングにもつながるかもしれない。
- 斉藤副委員長 このような地域のブランディングは今後も増えていくだろう。
- コミュニティ農園については、今後どのように動いていくのか期待しているところだが、50区画のうち10数区画は利用者がきまっていると聞いている。区画がすべて埋まり、採算ベースに乗ってくるといいと思っている。
- 農業は「情報の受発信」でも地域の人や事業者と絡める。またブランディングにもつながっていく分野ではある。ただ、相続が発生すると農地が減ることもあることが課題だろう。
- 農業については、食育に対して熱心に取り組んでいる人たちもいるので、伝言板を使って情報を発信していきたい。
- あと「地産地消の促進」や「農地を活かした食育活動」だが、これらはどこが推進母体となってくるのだろうか。
- 西川委員 学校給食などは地産地消の食材が使われているのか。

- 斉藤副委員長 現在はJAから給食用の食材を卸しているため、小金井産の食材は増えてきている。ただ、畑も多くなく、収穫できる量も限られているのでまかないきれないところもある。現時点では安定供給には至っていないが、農家の方々の協力もあって、学校給食に使える量は増えてきていると聞いている。
- 西川委員 学校給食だと農家だけでなく教育委員会も関わっているのか。
- 斉藤副委員長 教育委員会も関わっている。
- 清水委員 給食は午前中につくれないといけない。そのためかたちのよいものしか使えないと聞く。量はあっても供給できないということもあるようだ。B品とは言わないまでも市場に出せないものを使ってもらえる機会があると、農家にとってもよいし、市民にとっては小金井市の食材に触れる機会となる。
- 大坪委員 B品の野菜を飲食店で使うことについては調べたことがある。実際B品といっても全体の収穫量からすると数%のようで、飲食店が本気で取り組もうとすると供給できなくなる。そもそも小金井市は野菜の収穫量自体が多くはないので、安定して飲食店に納品することは難しいだろう。現実的にはB品野菜も使っている飲食店が1か所ある、というぐらいになると思う。
- B品の野菜はムーちゃん広場で買えるが、あとは無人販売所で売るくらいだろう。ただ、この方法こそ地産地消だと思うので、これらの販売チャンネルをもっと発信していくのがいいだろう。
- 山城委員 市内スーパーで小金井野菜を販売しているところがある。自分はなるべく買うようにしているが、他のスーパーでも買えるようにはできないのだろうか。
- 斉藤副委員長 そのスーパーは熱心なバイヤーがいて、小金井野菜の取り扱いをがんばっていて、ブランド化しようとしているようだ。個人の思いによるものなので、横展開は難しいのではないか。それぐらいの熱意で取り組む人を増やす必要があるということでもあると思う。
- たくさん量を取り扱えるわけではないが、うまくSNSなどでアピールしていくことができればブランド化は可能なので、見せ方を工夫する必要はあるだろう。
- 農業の話はこれぐらいにしておいて、次は「チャレンジの場づくり」と「おもしろい人が集う場」について。これは「地域の人を事業者や活動とつなぐきっかけ」にも絡んでくる内容ではある。
- 以前、事業者のなかで「あきないくらぶ」というものがあり、商店街から何人かが参加して、取組について具体的に話し合ったことがある。「あきないくらぶ」は行政の経済課が企画してやっていたが、一般市民や農業関係者にもアイデアを持つ人材はいると思うので、参加者を広げてできるといい。ただ、人が集まりすぎても議論にならないので、「あきないくらぶ」のような組織をいくつか立ち上げてはどうか。その際、集まる場所が問題になるが、行政主導であれば市役所の会議室が使えると思う。地域でおもしろいことをする人をつなぐとすると、やはり場を提供する必要があると思う。
- このような取組をしている自治体は他にあるのか。
- 西川委員 空き家や空き店舗を使って新しいチャレンジしたい人を募集し、事業のスター

トをサポートする事例はある。場所を提供することで、まちのにぎわいをつくることになるので、組み合わせを考えていく必要はあるだろう。

斉藤副委員長 何かテーマを決めて募集するのか。

西川委員 それがいいと思う。

斉藤副委員長 まちのにぎわいづくりをテーマにしても、プロの方しか参画してもらえないと思う。空き家など、もっと絞ったテーマがいいと思う。そのためにも集まるための場所が必要だと思う。行政でも商工会でも観光まちおこし協会でも、どこかが場所を確保しないと、集まりが持続しない。どこかが主体となってバックアップをしないといけない。

西川委員 それなら短いスパンでまわした方がいいだろう。

斉藤副委員長 テーマを決めて、半年くらいがよさそうだ。広く人を募るのであれば、長くやるのはたしかに得策ではない。

大坪委員 丸田ストアーは、新しい人たちが古い空き店舗を使って、いろいろな店を出している。K0-T0とは違って、コミュニティが形成されている気がしている。丸田ストアーに大人が集える児童館のような場があればいいのではないかな。チャンスがなければチャレンジはできないので、集まる場でチャンスをつかめればいいと思う。

斉藤副委員長 小金井市人は、ものや緑を大切にしたり、手間がかかっていて商売が成り立っているのか分からないようなお店が好きな傾向がある。丸田ストアーのように住宅街のなかにあると回遊性につながるし、日常生活圏のなかで楽しく暮らすためにも有効である。そのような場があることを伝えていくための情報発信が重要になるのだと思う。

小金井市は日常生活圏では7～8個の地域に分けることができる。それぞれの生活圏に商業地があれば生活ができるようになる。それぞれの圏に名前をつけてはどうか。

大坪委員 エリアに名前をつけるのはおもしろい。

斉藤副委員長 実際に地域性も違うし、住民性も異なっている。エリアの特色を生かして、それぞれの生活圏をPRするのもおもしろいと思う。

山城委員 小金井市に店を出したい人にエリアの特色が伝わると、おもしろい商売ができるようになるのではないかな。自分のやりたい商売はこのエリアがあっているというように考えることができる。

斉藤副委員長 住民意識に地域性が出るので、そのあたりも加味しないと商売をやるにしても違ってくる。そのあたりをうまく情報発信できるとよい。

チャレンジの場と関連するかもしれないが、産業振興を取りまとめる行政職員も人材育成を行ってもらいたい。人事異動があるたびに、積み重ねてきた話し合いがあいまいになることもある。中期的な視点に立って産業振興のプロを育てるという努力を行政にも求めたい。

清水委員 転居してきた際、掲示板を参考にしているとの話があったが、何をもって情報収集してきたのか。小金井を知るときに、何を参考にしたのか。

高松委員 掲示板や市のホームページでイベントを調べたり、Facebookで情報を見つけた

りした。商工会のホームページも見ているが、拡散している気がする。吉祥寺に住んでいたころは、地元の情報を集約するホームページがあり、情報が分かりやすかった。

清水委員 ぱっと見で分かりやすいといい。調べたいのにたらい回しにされるのは大変である。

高松委員 探そうと思えば探せるが、もっと短時間で簡単には見つけることができればいい。

斉藤副委員長 「商店街の街路の安全面の整備」、「福祉や教育と商店街等の連携」だが、これは女性から話を聞きたい。まちを歩いているなかで問題だと感じたことはあるか。

清水委員 道路の段差問題はある。

高松委員 駅前の歩道は広いが、ドン・キホーテ周辺は片側しか歩道がない。ベビーカーや小さい子どもの手を引いて歩くときなどは怖い思いをする。
それに関連して質問だが、小金井街道の駅前近くに信号のない横断歩道があるが、そこを渡ろうと思っても車が止まらないことが多くある。信号を設置することはできないのか。

山城委員 そこは交通事故も頻繁に起きている。信号の設置は必要だと思うが、駅前に信号を多く設置したため難しいようだ。

斉藤副委員長 駅前の信号を減らすことはできないので、なかなか難しい問題である。

山城委員 市へ要望を出しても、小金井街道は都道なので、東京都の許可が出ないと設置できない。一方、東京都としては設置に関して問題が発生したときには責任を持ってないという姿勢のようだ。

高松委員 行政に問題が響いていないのかな、と感じる。

大坪委員 小金井街道は渋滞が多いので車やバスから歩行者が見えないという問題もある。車だと歩行者が突然現れるように見える。

斉藤副委員長 やり取りがあったことが伝われば、何かしらの対応をしなければいけなくなると思う。

実際、市内には危険な場所がいくつもあるので、例えば交通安全のための見守りをするなどの方法はあるかもしれない。

高松委員 注意を促す看板を置くことはできないか。

斉藤副委員長 歩道の段差や横断歩道は行政や警察とも関わってくるため、ハード面ですぐに改善するのは難しいと思う。

そろそろ終了時刻になるが、何か言い残したことはあるか。

山城委員 情報発信について多くアイデアが出たが、特にLINEの活用はまったく頭になかった。自分でもっとLINEを使えばよいと気づかされたし、商工会でも活用できる。こうしたツールがあることを周囲に提案していきたい。

大坪委員 以前、「楽しい人の会」という集まりがあった。参加者が楽しい友人をつれてきて、雪だるま式に交流の輪を広げようとするものだ。市民活動をするようになった人もいれば、起業した人もいて、市民の意識改革につながった。事業をしているだけでなく、一般の人でも参加できるような場をまたつくれるといい。

ただ人数を集めるだけでなく、質と量の両面を考えながら実施できるようにしていきたい。

高松委員 商店街だが、お店が狭いこともあって、ベビーカーと子ども2人を連れて利用するには不便を感じる。子どもが泣くことも気になるので、広くてセルフレジのあるヨーカドーの方を選んでしまう。もっと子育て世代が参加しやすい商店街にするにはどうすればいいのかを考えることは必要だと思う。

また、以前住んでいた高円寺や吉祥寺は、商店街は見るからに分かりやすかったが、小金井市はどこに商店街があるのか分からない。商店街は空間的に連なっているイメージがあったので、点在しているとは思っていなかった。いまから商店街を空間的につなげることは難しいと思うので、何か分かりやすくするアイデアがあるといいと思う。

斉藤副委員長 昔の商店街には物販店もあったが、いまは大型店におされて、飲食店とサービス業しか残っていない。そうなると地域とのつながりも薄くなってしまし、商店街ではなくなってしまう。対策を協議するにしても、すぐに有効な手があるわけではないのが現状である。

西川委員 今日の話し合いを聞いて、具体的な案もあり、実現できるとまちも変わってくると感じた。小金井市は人口が増えている状況なので、移住してきた人に小金井市の魅力を伝えていくのが重要だと感じている。

そのために、例えば市役所で住民票を移すタイミングをうまく使って、小金井市の情報を伝えることはできないかと考える。

商店街については、個々の商店街に魅力はあるが、それをどうやって伝えていくのが課題であろう。デザインの力を借り、若い人たちが行きたくなるようなデザインを持った媒体をつくるのが重要かと思う。その意味では「まろん通信」というブログは活用できる可能性を秘めているのではないか。今あるものを使っていくことも考えるべきだろう。

大坪委員 たしかに「まろん通信」は一般の方も参加できる情報誌なのでおもしろい。

山城委員 写真もきれいなので、きちんと活用できれば有益な情報発信の媒体となるだろう。

斉藤副委員長 商店街に生鮮三品（野菜、鮮魚、精肉店）が揃っているのは市内では京王通り商店街だけになっている。この3つがないと夕食の買い出しが揃わないのでスーパーに流れていくと言われている。商店街の最後の砦とされていた酒屋だが、スーパーでも酒類の販売ができるようになったため商店街は壊滅的な状態になってしまった。商店街に行かなくてもスーパーで揃うようになってしまったなかで、商店街をこれからどうしていくか。飲食店やサービス業は店頭ではPRしにくい業態なので、情報誌などを使いながら発信していくしかないのが現状である。

高松委員 普段の買い物以外で商店街に行く機会が何かと考えると、お祭りがあると思う。短期的な集客でしかないが、商店街を知ってもらうことにはつながるのではないか。

斉藤副委員長 お祭りは商店街の存在を示す意味では大切だが、店員の人数が少ないため、お

祭りがあると、それをするために店を閉めないといけない場合が多い。そうなるとお店を知ってもらえない。もちろん地域コミュニティのためにやることもあるが、ジレンマはある。

高松委員 市民の声を吸い上げるために、目安箱は設置できないか。

斉藤副委員長 小金井目安箱ならすぐに設置できそうだし、市長に対して直接意見できる場は貴重である。

まとめ

中庭委員長 予定時間を超過してしまっただが、最後に各グループの意見についてコメントをお願いしたい。

斉藤副委員長 27項目あったが、「地域の人と事業者をどうつなぐか」、「農業関係」、「おもしろい人が集うチャレンジの場」、「情報の受発信」、「商店街の安全、福祉、教育」という5つの項目に分類して話し合った。それぞれ具体的な案を出し、色々な意見が出たので楽しかった。

中庭委員長 最初の方にある項目に議論が集中し、すべてを話し合うことはできなかった。しかし、現状、事業が別々で行われていることが多く、協働で連携していけば色々なことができるのではないかというアイデアがたくさん出てきた。出されたアイデアをまとめていけば、いいプランになると思う。
本日の意見をもとにプラン案の作成を事務局で進めてもらいたい。最後、事務局から何かあるか。

事務局 次回の委員会は、12月12日（日）午後2時から開催させていただきたい。会場は別途連絡する。

次回は計画書として、ある程度の内容を示せるようにする。

3. 閉会